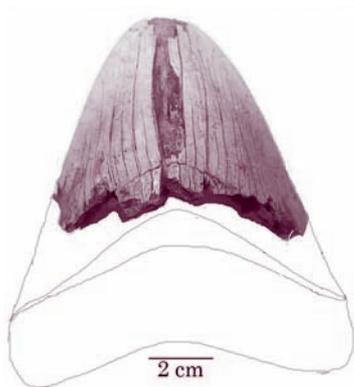


常陸大宮の縄文人と巨大ザメの化石

<泉坂下遺跡から出土したサメの歯化石>

常陸大宮市には、日本を代表する土器などが出土している「泉坂下遺跡」があります。昨年その遺跡の発掘中に、三角形で表面に縦筋の細かな割れ目がたくさんあり、縁にはノコギリの歯の様な細かな“ギザギザ”の刻みのある物体が発見されました。

この物体について調べたところ、歯の根元（歯根）の部分が欠損した、史上最大の肉食性サメ類カルカロドン・メガロドン（以下メガロドン）の歯の化石であることがわかりました。（図1）そして、もともとの歯の大きさ（高さ）は12cmを超えること、また、この歯の大きさからこのサメの全長は10m以上と推定されました。



◀泉坂下遺跡の
メガロドンの歯

図1

メガロドンの和名（日本での呼名）はムカシオオホジロザメといます。生存したのは1800万年（2800万年説もあります）から1500万年前の間と考えられています。現在生きている肉食性で最大のサメは、映画「ジョーズ」のモデルとなった、カルカロドン・カルカリアス（和名ホホジロザメ）（以下カルカリアス）です。このカルカリアスは、メガロドンが地球上から姿を消す頃に現れたようで、同時代の地層からどちらの化石も発見されています。

しかし、両者の大きさの違いは想像を絶するもので（図2・3）、カルカリアスの全長が6m程度に対して、

歯の化石から復元されたメガロドンの大きさは、優にその倍を超えることが知られています。メガロドンの歯の化石は、昔、日本では「天狗の爪」と呼ばれていました。化石を知らない人々にとって、その形や色などから“天狗様が落とした爪”と考えたのでしょう。古くからお寺や神社で大切に祀られていることもあります。ヨーロッパでは「舌の化石」と考えられていました。



図2

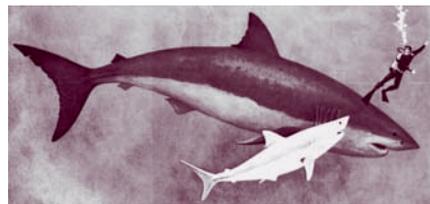


図3

図2・3ともメガロドン（大）
カルカリアス（小）

（図2・3ともEllis and McCosker,1991より）

<出土したサメの歯化石の持つ意味>

泉坂下遺跡から出土した巨大な歯の化石は、歯根の部分は欠落していますが、全体の磨滅が進んでいないことから、石ころのように洪水で運ばれたものではなく、人の手（縄文人の手）によって泉坂下まで運ばれたものと想像されます。では、この歯の化石を縄文人が何処で見つけたかという疑問が生まれます。常陸大宮地域には、熱帯の海が広がっていた時代があり、その時に積もった地層が広く分布しています。その頃の海にメガロドンも住んでいました。平成24年度の企画展で展示した、世喜小学校児童採集のムカシアオザメなどの歯の化石も、そうした地層から発見されたものです。したがってメガロドンの化石は、泉坂下から近い場所でも発見できる可能性があるということです。

ここに紹介した泉坂下遺跡出土のサメの歯の化石は、1500万年～1600万年前の地層から、縄文人が3000年前頃に採集したものを、2013年に再び現代人が採集するという、大変ドラマチックな経歴を秘めた貴重な資料といえます。そしてまた、この巨大なサメの歯化石は、遺跡から出土したものとしては国内で2例目の『カルカロドン・メガロドン』となるでしょう。

※財団法人自然史科学研究所 菊池芳文氏

よりご寄稿いただきました。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450